

対魔師 風俗店に潜入した対魔師は 敗北します♡ 体験版

世界観(エッチパート見たい人は飛ばしてね)

ある日、東京に突如として異世界への扉が開いた。

その扉から現れたのは、

淫魔、女オーク、精食人などと呼ばれる存在たちだった。

人類はそれらを「魔物」と呼ぶようになった。

魔物たちは人々を襲う事件を引き起こし、

さらに人間社会へと紛れ込んでいく。

この事態に対処するため、

魔物に対抗する専門部隊——

「対魔師」が設立された。

魔物たちは男性の精を好む性質を持つため、

対魔師は基本的に女性のみで構成されている。

しかし主人公である「僕君」は、その高い能力を評価され、唯一の男性対魔師として選ばれたのだった。

淫魔（サキュバス）

人の精を食らい、特濃フェロモンを操る誘惑者。

美形がほとんどで、精を搾り取るのに特化した体の構造になっている。

女オーク

森の主たる凶暴なる緑肌種族。戦士としての誇り高く、気に入らぬ者は徹底的に破壊する。

力だけなら魔物の中でトップクラス

精食人（アンドロパシー）

理性と獣性が混在する異界の美食家。

人間男性の精子のみを嗜好品とする特異種。

知性が高く精を搾り取るための兵器や薬を作り出せる。

見た目も人間と変わらないため、魔物の中で一番厄介な存在

その他

今後追加予定

ある日、

本部から男性が行方不明になると噂の風俗店を見つけたとの情報が入り、

そして、僕君一人で潜入捜査に行くことになった。

普通の対魔師なら無茶ぶりの作戦。

しかし、これまで幾多の修羅場をくぐり抜けた彼は、不安よりも自信の方が勝っていた。

「僕君、準備はいいかい？」

薄暗い対魔師本部の地下格納庫で、橘レイナ司令官が問いかける。

三十代半ばの凛とした美貌を持つ彼女は、白衣の袖口を軽く整えながら新型追跡デバイスを手渡した。

「はい！いつでも行けます！」

元気よく答えるのは主人公

「僕君」

小柄で童顔ながら、並外れた戦闘センスと異界知識を持ち、
十代にして対魔師史上初の男性隊員である。

「さて....行くか」

「ま、待って！」

出発しようとした時、幼馴染のユリカが心配そうな声で話しかけてくる

「その……任務が終わったら……大事な話があるから聞いてくれる？」

ユリカがもじもじと両手を組み合わせ、視線を床に落とした。

長い睫毛がかすかに震えている。頬はほんのり紅潮し、
唇をぎゅっと噛みしめる様子は普段の彼女からは想像できないほど弱々しかった。

「……？ わかったけど、今じゃダメなのか？」

僕君は首を傾げた。ユリカは慌てたように首を振る。

「だ、だめっ！ その……今じゃ……心臓がもたないというか……ちゃんと落ち着いて言いたいって
うか……」

言葉を濁すユリカを見て、橘司令官が小さく咳払いをした。

「僕君くん、そろそろ時間よ」

腕時計を確認するレイナの目つきが鋭くなる。潜入開始時刻が迫っていた。

「わかった。戻ってきたら聞かせてくれ」

僕君は真剣な表情でユリカを見つめ、小さく頷いた。その言葉に彼女の瞳が微かに潤んだ。

「うん……絶対、無事に戻ってきてね」

祈るように両手を胸元で合わせるユリカ。その切実な眼差しに、僕君は初めて胸の奥に重いものが沈むのを感じた。

――第1章 優秀な対魔師の敗北――

繁華街の外れ、違法風俗店が密集するエリアの一角にその店があった。

看板には「癒しの園」としか書いていないが、

情報では「男を喰らう魔窟」

三階建ての古びたビル全体が娼館となっている。

「いらっしゃいませえ〜♪」

入口で迎えたのは紫のチャイナドレスを纏ったウェイトレスだった

本来の意味での「人間」かどうか、

まだ判断がつかない。ただその甘ったるい香水の香りが鼻腔を刺し、奇妙な眩暈がした。

「本日はどのコースになさいますう？」

ぷるんっ

柔らかな栗色の髪をかき上げながら、ウェイトレスが笑う。

胸元の大きく開いた衣装から胸が覗く谷間が暴力的に迫ってくる。

「……一番安いのでいいよ」

内心の動揺を押し殺して答えると、

彼女はにっこりと微笑みながらタッチパネルを操作した。

「じゃあ～ベーシックコースですねえ♪ お相手選びはお任せでもよろしいですかぁ？」

「ああ、それで頼む」

「では～101の部屋へどうぞ♡」

恐る恐る指定された個室に入ると
意外にも清潔な部屋が広がっていた。

ベッドサイドのライトが青白く揺れ、
天井からは星屑を模した照明が降り注いでいる。

——(さて、集中しないと)

潜入任務に集中しようと瞼を閉じた時、ノックの音が響く。

「失礼しま〜す♡」

扉が滑るように開いた。僕君の息が止まった。

そこに立っていたのは、完璧なプロポーションを持つ女性だった。

肌は陶磁器のように白く、波打つ金髪が肩まで垂れている。

黒いラバースーツが身体にぴったりと張り付き、
少し開いたチャックから胸の谷間と脚線美を見せつけている。

ぷるん♡

「こんにちはお兄さん♡ ミマで～す♡」

「今日は最後までいっぱい骨抜きにしちゃいま～す♪」

(うっ....美人だ...)

蠱惑的な声と共に近づいてくるミマ

猫のような紫の瞳でこちらを覗き込んだ。

魅力的すぎる彼女の姿に、見とれてしまう

「じゃあまずシャワー浴びよっか♡」

「私が丁寧に洗ってあげる♡」

はそう言ってバスタブのある浴室へ手招きした。

(落ち着け...作戦通り、彼女を眠らせてから隠し部屋を探さなければ)

けれど目の前の美貌に理性の堤防は今にも決壊寸前だった。

「ほら♡服脱いでお兄さん♡」

「脱がないと洗えないでしょ？」

ギャル特有の砕けた口調が、甘ったるい声音で響く。僕君は思わず眉をひそめた。

「いや……その前に少し話が

んちゅ...♡

言葉を遮るように、ミマは突然飛びつき、
唇にチュッ♡と音を立ててキスをした。

「あれれー?ちょっとイヤだぁ♡

キスだけでガチガチじゃん♡」

「もしかしてお兄さん♡そんな可愛い見た目してこういうこと初めて？」

服越しにもわかるほど巨大な胸が、僕君の胸板に押しつけられる。

甘いフェロモンのような匂いが鼻腔を刺激し、思考が霞み始めた。

(……っ！このままじゃ任務どころか……！)

理性の糸を必死につなぎ止めようとするも、

ミマは容赦なく追撃する。

「ねえねえ、脱ぎ脱ぎしよーよお♡」

彼女の手が僕君のベルトにかかり、ゆっくりと外していく。

「ちょっ、待っ……！」

「待ちませーん♡」

舌舐めずりしながら、ミマは楽しそうに笑う。

「あっ..ちょ！」

ズルッ....ポロン

ズボンを下ろされ、露出した僕君のペニスを見たミマが目丸くした。

「まあ！小さくて可愛い♡」

クスクス....

ミマが笑いながら僕君の股間を指さす。

恥ずかしさで顔が真っ赤になる僕君。

「あうう....///」

「み、見ないで....///」

顔を真っ赤にしながら両手でペニスを隠すが、
それを防ぐように、ミマの手が僕君の腕をつかんだ

「隠しちゃだーめ♡」

「こんなに可愛いくてちっちゃいち○ぽ、珍しいもん♡」

ミマが耳元で囁くように言う。その熱い息遣いに僕君の背筋がゾクリと震えた。

屈辱的なはずなのにペニスを固くしてしまう

(くそ……これじゃまるで……)

恥ずかしさで俯く僕君を見て、ミマはさらに追い打ちをかける。

「あれあれ～？なんか怒ってる～？」

ツンツン....

指先が竿に軽く触れる。

「ちっちゃいって言われて、こんなに固くなってるってことは……」

ニヤリと口角を上げる。

「お兄さんって、実はすごいマゾ？」

「ち、違う！」

反射的に否定するが、声は震えていた。

「まあまあ♡」

ミマは突然、胸元のファスナーに手をかけた。

「でもごめんね♡」

「悪いことしちゃったよね♡ そのお詫び♡」

ファスナーを下した瞬間、豊満な乳房が解放される。

深い谷間、ぷっくりした乳輪。

バルンッ！プルッ♡

その圧倒的な質量に、僕君の視線は釘付けになった。

「ほおら♡ これでお互い様だよ♡」

「あ、ちょっと蒸れて汗臭いかも♡」

ムワあ〜♡

そう言いながらも、ミマは堂々と乳房を差し出してくる。

谷間からは長時間閉じ込められた湿った熱気が漂い、

確かに甘酸っぱい汗の匂いが鼻を掠めた。

「うっ……汗臭い……」

僕君は混乱した。理性は嫌悪を訴えるのに、

なぜか喉がゴクリと鳴ってしまう。

「え〜？ひど〜い♡」

ミマはにやりと笑う。

「でも、お兄さんさっきから……顔赤くなってんじゃん♡」

「ち、違う！これは……！」

弁解しようとしても、視線はどうしても谷間に吸い寄せられる。

湯気が立ち昇るような錯覚を覚え、股間がさらに硬くなる。

「ふふ♡体は正直でカワイイね♡」

ミマはわざとらしく腰をくねらせ、乳房を左右に揺らした。

「ほら見て♡こんなに揺れるんだよお♡」

ブルンブルンッ

弾む動きに合わせて、甘酸っぱい汗の匂いが強く漂う。

任務のことなど頭から消え去りそうで、僕君は必死に齒を食いしばった。

「ねえねえ♡嗅いでみたいんじゃないのお？」

挑発的な問いに、彼は顔を逸らす。

「そ、そんなこと……」

顔を赤らめる僕君。同時に、

下半身が激しく脈打つ。理性は逃げろと叫ぶが、本能が拒絶を許さない。

(ヤバい……もう……)

しばらくの沈黙が続き、しびれを切らしたミマが仕掛ける

「もう！正気になれない子にはお仕置き♡」

「えいッ♡」

ミマは突然、乳房で僕君の顔面を挟みこんだ！

ムギュウウ♡

「んぐっ……！」

柔らかさと同時に、湿った熱気が直接鼻孔に流れ込む。

甘ったるい女の匂いと、ほのかな汗の酸味が混じり合い、頭がクラリとする。

「ど〜お？あたしのおっぱいは♡」

フウウウツ……♡

耳元で囁かれ、背筋にゾクリとした痺れが走る。

「ふふ♡息荒くなってるし♡」

鼻息が谷間に当たり、さらに湯気のような熱気が生まれる。

意識を保とうとするたびに、ミマの肌の感触と匂いが理性を削っていく。

「ねえ♡もっと吸ってみてよお♡」

彼女は乳房をぎゅっと押し付けた。

ムニュウウン♡

ギュッ♡ムギュッ♡

「もっともっと感じさせてあげるからねえ♡」

締め付けが強くなり、さらに多くの汗腺から蒸気が噴き出す。

蒸れたサウナのような温もりと、ミルクィな甘さ、

そして僅かに滲む塩辛さが複雑に絡み合い、意識が遠のきそうだ。

「んんッ♡///……！」

悲鳴をあげると同時に僕君の全身に鳥肌がたち、

体から力が抜ける。

そして――

ぶびゅっぶびゅるる〜♡

「ぎゃははは♡ おっぱいだけでイッちゃった〜♡」

僕君の下半身は素直に反応し、無慈悲な射精が訪れた。

敏感な鈴口からは白濁液が何度も迸り、ミマの太ももを汚していく。

「あうっ♡……んんんッ……！」

自らの身体の反逆に愕然とする僕君。ミマは目を丸くして笑う。

「あはは♡ なにそれ♡汗臭いおっぱい臭いだけでイっちゃうとか、マジで初心過ぎい〜♡」

嘲りながらも、どこか愛玩動物を見るような眼差しを向けている。

ビュルルッ！ ドピュッ！

射精は一向に止まらず、精液が床に滴り続ける。

任務も理性も何もかも忘れ、ただ雌の体臭に翻弄されていく自分が信じられなかった。

「ほらほらあ♡まだまだ出るよねえ？」

ミマが乳房をさらに押し付ける。

続きは本編で....